

『エコール・ド・パリの画家 板倉鼎 (かなえ) をご存じですか』

水谷 嘉弘

四〇年のビジネスマンライフをフルリタイアして思い立った事がある。かつて一度は志したアートの世界に戻れないだろうか・・・

その頃、はじめて知ったのが板倉鼎・須美子という画家夫妻であった。平成二九年三月二七日の日本経済新聞文化欄に「悲運の夫婦 忘れられぬ画業―一九二〇年代のパリで活躍、早世した板倉鼎・須美子を紹介―」という記事が掲載されたのがキッカケだった。

第一次、第二次世界大戦間の時期、パリ在住の藤田嗣治、シャガール、キスリング等外国人画家が活躍した所謂「エコール・ド・パリ」の時代にフランスに渡り、洗練された明るい色調の絵が注目されたものの病に倒れ二八歳で客死した画家と、その妻―彼女も絵を描いたが帰国後二五歳で病没―である。記事を読んで同年四月に目黒区美術館で開催された「よみがえる画家―板倉鼎・須美子展」を訪れ、講演を聞いて一気に惹かれた。これ程の作品を描く画家が居たのか驚きでもあった。

板倉鼎が僕の住む松戸市出身であり、作品の多くを松戸市教育委員会が所蔵していること、板倉鼎・須美子の研究

者であり松戸市美術館準備室長(当時)の学芸員田中典子氏が大学の直系の後輩だったこと等からこの画家夫妻の存在と作品を世に紹介する一助を担いたいと思いついたのである。これでアートの世界に関わって行こう！

平成三〇年、一般社団法人「板倉鼎・須美子の画業を伝える会」を設立した。板倉夫妻の顕彰については、既に松戸市教育委員会美術館準備室に依りその作品や関係資料の悉皆調査が為されており、千葉県立美術館や松戸市立博物館で回顧展も開催されていた。縁故者や研究者が長年地道な活動を行っていた。社団法人はこれらの方々と連携してそのサポーター役となることを主旨とした。

早速、松戸市教育委員会から平成三一年一月に松戸駅近くの聖徳大学博物館で開催される「フジタとイタクラ展」の後援団体になってほしいとの依頼があった。この展覧会は日仏友好一六〇周年を記念してパリを中心にフランス全土で日本文化を紹介する「ジャポニスム二〇一八」の一環「藤田嗣治展」@パリ日本文化会館に呼応して企画されていた。そこで、駐仏日本大使の木寺昌人氏からメッセージを入手したり、同氏の紹介で来場したパリ市立テュルヌスキ美術館ルフェーブル館長をアテンドしたりした。また、藤田嗣治の又甥、藤田嗣隆氏と板倉鼎の姪、神崎眞

子氏を会場で引き合わせもした。九〇年前、パリで撮影された日本人画家たちの集合写真に二人の(大)叔父たちが写っているのである。

展覧会は新聞やテレビで多く報道された。その後も社団法人のアレンジでNHK「ラジオ深夜便」に取り上げられたこと等もあり、これまでの活動と相俟って少しずつではあるが板倉鼎・須美子の事が知られるようになってきている。

今年に入って、社団法人では広報ツール充実のためホームページを開設しフライヤー(チラシ)も発行した。キヤッチコピーが【エコール・ド・パリの画家 板倉鼎(かなえ)をご存じですか】である。是非一度ご覧いただきたい。<https://itakurakanae.com>

今後は更に活動領域を拡げ、板倉鼎・須美子を知って貰うべくネットワークの拡大、メディアへの働きかけや画集やレプリカの作成、関連資料の蒐集等を進めて行きたいと考えている。

(参考)

板倉鼎(一九〇一―一九二九)

千葉県松戸育ち、東京美術学校(現東京藝術大学)卒業後、一九二六年妻須美子と共にパリに留学。明るく洗練された色彩と堅固な構成のモダンなスタ

イルが評価されサロンドートンヌ入選も果たしたが、二八歳の若さで客死した。現在、松戸市教育委員会美術館準備室を中心に再評価を進めている。

板倉 須美子(一九〇八―一九三四)
ロシア文学者昇曙夢の長女として生れ与謝野鉄幹、晶子の媒酌で鼎と結婚。パリで鼎の手ほどきを受けて制作を始め素朴で詩情豊かな作品が藤田嗣治に絶賛された。夫、幼い娘二人を相次いで亡くし本人も帰国後肺結核で早世した(二五歳)。

